

成人期のアイデンティティ統合を支える

充実感と「関係性」の意義

—配偶者との「ケアする」「ケアされる」の二方向から—

山本孝子*

The Significance of “Relatedness” in Psychological Fulfillment for Integration of Identity in Adulthood: “Care-giving” and “Being cared for” between Spouses

Takako YAMAMOTO*

The purpose of this research is to clarify the significance of “relatedness” to psychological fulfillment in the process of integration of identity in adulthood. Conventionally, this identity process has been considered from the standpoint of autonomy/isolation. Ohno (1984) defines psychological fulfillment in life as “emotion experienced in uniting a healthy ego into one's identity”. Results show that both “providing care” and “being cared for” between spouses enhance feelings of fulfillment which favor selfhood and self-regard as potentials for forging identity. Furthermore, it is shown that not only care-giving but also the ability to express the need to be cared for is an important factor for relatedness.

key words: identity, relatedness, care, spouse

問 題

Erikson が提唱したアイデンティティの概念は、いまやライフサイクルの変化、価値観の多様化に伴い、青年期のみならず、生涯全般にかかわる概念として認識されている。Erikson (1959) によれば、「主観的側面からみると、自我同一性とは、自我のさまざまな総合方法に与えられた自己の同一と連続性が存在するという事実と、これらの総合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の同一と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚である」（小此木訳, 1973, p. 10）とされる。このように、Erikson はアイデンティティ形成における他者との「関係性」の側面を重視していたにもかかわらず、彼

の提唱したアイデンティティの概念を実証しようとしてきた後続の研究者たちは、「自律・分離」の側面にのみ焦点を当てがちであった。その点に関して批判的な立場から、再び「関係性」に焦点を当て直そうとした研究者として Gilligan (1982) と Josselson (1994) があげられる。

Gilligan は、道徳性発達の研究において、Kohlberg (1984) の発達観を、「自律・分離」を中心に置くものとして批判した。彼女は研究を通して「女性が道徳の領域に入る問題を構成するときには、責任と思いやりの概念に焦点が当てられるということ、女性の思考のなかでは自己と道徳の概念が密接に結びついているということ、そして究極的には、女性の声を慎重に除外していくのではなく、むしろ女性

* 佛教大学大学院教育学研究科

の声に示されている相違を含むように拡大された発達理論が求められていること」(岩男監訳, 1986, p. 187)を指摘している。Josselson (1973) は、女子大生のアイデンティティ形成について精神力動的な見地から研究し、男性のアイデンティティ形成は直線的であるが、女性のアイデンティティ形成は同心円的であると比喩的に表現して、女性のアイデンティティ形成における他者との「関係性」の重要性を強調している。このように、両者ともその過程における男女の様相の違いを主張し、これまで見落とされがちであった「関係性」の側面に目を向けている。

その後、Josselson (1994) は、男女いずれのアイデンティティ形成にも共通する「関係性」の8つの次元を示している。それによれば、その最高の次元は「慈しみ・ケア」で、他者に対する関心や感受性、世話することへの責任を伴う結びつきを意味し、Gilligan (1982) が示したように、判断の際に自分自身よりも他者の声に注意を払うことのできる高度な次元であるとされる。これらの「関係性」からの新しい見方は、アイデンティティ形成にとって「自律・分離」と同様に「関係性」の側面が男女ともに重要な要素であることを示している。

日本においても、これら両側面に言及した研究として山本 (1988, 1989)、三枚 (1998)、伊藤 (1993, 1997, 1998) によるものがあり、アイデンティティ形成過程において両側面が統合に向かう様相について論じている。また、アイデンティティ形成過程を関係性のなかでもとくに「他者をケアする」という観点からとらえ直すことの必要性を訴えた論文に岡本 (1995)、杉村 (1998)、山本 (2002) がある。

ところで、「関係性」の側面を実際に調査したものとしては、岡本 (1991, 1996) の研究があるが、その対象者はいずれも女性のみである。また、「ケアする」、「ケアされる」という「関係性」の側面を夫婦関係からとらえた研究に、数井ら (1996)、平山 (1999) によるものがあるが、いずれも男性を分析対象とはせず、男性は単に間接的な関わりとしてのみとらえられている。男性をも含めたケアに関する研究としては岡本 (1997) があるが、ここでは高齢者の介護という「ケア」から「関係性」にもとづくアイデンティティの意味をとらえようとしたものであり、養育期の子どもを含めた家族ダイナミックスのなかで検討していくことが求められる。

ケア (care) ということばには、「心配」「心遣い」といった心の動きを表す意味と、「世話をする」という行動を表す意味がある。このいずれにも女性的な細やかな気配り、優しさ、温もりといったイメージがあるためか、家族を「ケアする」主体として男性をとりあげた研究はほとんど見当たらない。しかし、Josselson (1994) が示しているように、「慈しみ・ケア」を最高次元とする「関係性」の側面は男女いずれにも共通する重要な側面であると考えられる。そこで、本研究では女性とともに男性も、日常の家事・育児、家族への気遣い、その他関係志向的な関わりをする「ケア」の主体としてとらえる。また、大野 (1984) が、健康なアイデンティティを統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情を充実感とし、その重要性を指摘していることを受け、充実感とケアとの関係についてとりあげる。

上述のような背景のもとに、成人期のなかでも子育て期にある両親を対象として、「ケアする」「ケアされる」という二方向からの「関係性」が、充実感に及ぼす効果とその意義について検討することを本研究の目的とする。

方 法

1. 調査時期、調査対象、手続き

本調査にさきがけて「生きるうえで大切にしていること」を検討するために、1999年11月～12月に子育て中の両親25組に対して自由記述による予備調査を行った。その結果にもとづいて調査票を作成し、2000年2月～3月に京都市北区内の私立幼稚園および広島市西区内の私立保育園・保育所の合計4園に在園する園児を通して調査票を両親に配布し、約2週間後に回収箱へ投函してもらうという方法で回収した。本研究では京都と広島という異なる地域の標本を用いたが、どの尺度についても有意な差は認められなかったため同一標本として扱い、回答を得られた334世帯(回収率60%、父親280名、母親331名、合計611名)を分析対象とした。父親の職業は56%が会社員、11%が公務員、残り33%が自営・その他であった。母親の44%は専業主婦、23%がフルタイムで働き、残り33%はパート・在宅勤務など、なんらかの形で職業をもっていた。父親の年齢は、59%が30代、32%が40代、残りの9%は20代以下であった。一方、母親の年齢

は、74%が30代、13%が40代、残りの13%が20代以下であった。子どもの数は「2人」が最も多く全体の半数以上を占め、ついで「3人」「1人」「4人以上」の順であった ($M=2.09$, $SD=0.73$)。家族形態は、核家族が75%近くを占め、約20%が夫または妻の親との同居であった。ひとり親家庭は、全体で28世帯 (うち2世帯は父子家庭) であった。

2. 調査内容

①充実感尺度

本調査では大野(1984)の充実感尺度を使用した。各項目に対する回答は、今の自分に「非常にあてはまる」(5点)、「ややあてはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「全くあてはまらない」(1点)の5段階評定とした。

②配偶者間ケア尺度

大日向(1988)の愛着尺度を翻案し、「相手をケアしたい」(表出方向)・「相手にケアしてもらいたい」(願望方向)の二方向から、配偶者への相互的なケア感情について調査することを目的として、ケア内容を示す10項目を作成した。ついで、教育学研究科の教官および大学院生計3名の評定により、3分の2以上の一致率を得た9項目を採用した。なお、表出方向については「してあげたい」と「実際、している」、願望方向については「してほしい」と「実際、してくれている」のそれぞれ2側面についての回答を求めた。回答形式は、「非常にそう思う」(4点)、「ややそう思う」(3点)、「あまりそう思わない」(2点)、「全くそう思わない」(1点)の4件法を用いた。

③生きるうえで大切にしていること

予備調査における自由記述の内容と伊藤(1993)の「個人志向性・社会志向性尺度」とを照合・検討し作成した「生きるうえで大切にしていること」10項目のうち、最も該当すると考えられる2項目をチェックさせた。なお、(2)自分の心に正直に生きる、(4)人生を自由に楽しむ、(7)社会(周りの人)に頼らず自立する、(8)自己を向上させる、(9)自分の個性を活かす、の5項目を「自立・分離志向項目」とし、(1)自分の役割を果たす、(3)身近な人を支える、(5)人とのつながりを大切にする、(6)社会(周りの人)に役立つ、(10)周りの人の気持ちを考える、

の5項目を「関係志向項目」とした。前者を「自律」ではなく「自立」としたのは、これら志向項目に「外部からの力にしばられないで、自分の立てた規範に従って自分の行いを規制すること」(林, 1985, p. 619)という意味の「自律」と、「他の力を借りることなく、また、他に従属することなしに自分の力だけで存続すること」(林, 前掲書, p. 619)という意味の「自立」の両方が含まれるが、既述の大野の尺度で「自立」と命名されていることや、本研究が配偶者間のケアを検討するものであることを考慮したためである。

結 果

1. 充実感尺度の因子分析

「充実感尺度」20項目への有効回答609名分に対し、固有値1.00以上を基準として主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を行った。その結果、抽出された4因子までで全分散の49.3%が説明された(Table 1)。第1因子を「充実感-空虚感」、第2因子を「接近・相互信頼-孤立・不信」、第3因子を「自立-依存」、第4因子を「日々の充実-単調」とそれぞれ命名した。尺度全体の合計得点は、大野の研究では α 係数.96と信頼性が非常に高く、本調査においても高い信頼性が得られた($\alpha=.78$)。

2. 「関係性」の側面

「関係性」の側面については、「ケアする」(表出方向)および「ケアされる」(願望方向)の二方向から検討した。配偶者間ケア尺度の α 係数は表出方向では「してあげたい」が0.94、「実際、している」が0.90を示し、願望方向では「してほしい」が0.90、「実際、してくれている」が0.91を示して、信頼性のあることが確認された。

(1) ケアする(表出方向)

まず、ひとり親世帯(配偶者なし)のデータを除外し、「してあげたい」で31%以上を高位群とし、32%以下を低位群とした。また、「実際、している」については、26%以上を高位群とし、25%以下を低位群とした。それぞれの高位群と低位群の比率が異なるのは、妥当な知見を得るに十分な対象者数を確保することと、同点者がいたことによる。ついで高位群と低位群で充実感の各因子の得点の差を検定した(Table 2)。その結果、配偶者へのケアについて

Table 1 「充実感尺度」20 項目に対するバリマックス回転後の因子負荷量ならびに寄与率

No.	項 目	F1	F2	F3	F4
9	私は生きがいのある生活をしている	.74	.33	.01	.15
12	毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある	.66	.07	.18	.31
5	生活に充実感で満ちた楽しさがある	.65	.31	.12	.28
13	毎日の生活に張りがある	.64	.28	.10	.36
20	私は価値のある生活をしていると思う	.61	.37	.05	.18
18	自分の信念に基づいて生きている	.55	.16	.42	.06
4	自分の責任を果たすことに喜びを感じる	.55	.15	.24	.09
16	私には毎日の生活の中で何かへの使命感がある	.49	.04	.20	.05
8	生まれてきてよかったと思う	.48	.38	.08	-.05
6	私は主体的に生きていると思う	.46	.09	.36	.11
#7	私一人が取り残されているようで寂しい	.16	.70	.18	.20
#15	私をわかってくれるひとがいないと思う	.15	.68	.06	.06
#3	だれも私を相手にしてくれない	.21	.60	.13	.13
#19	自分の理想とかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる	.11	.52	-.03	.35
#11	自分が情けなくイヤになる	.11	.47	.36	.18
#14	いざとなるとどうしても人をたよってしまう	.07	.16	.67	.15
2	私は精神的に自立していると思う	.23	.15	.60	-.16
10	私は独立心が強いと思う	.40	-.10	.52	-.03
#1	毎日毎日、変化のない単調な日々でつまらない	.26	.25	.13	.67
#17	毎日の生活に退屈している	.29	.42	.07	.60
寄 与 率 (%)		19.8	13.6	8.7	7.1

#: 反転項目

Table 2 配偶者へのケア（表出方向）高位群と低位群との充実感の比較

ケア	高位群 (してあげたい) N=156 M (SD)	低位群 (そう思わない) N=160 M (SD)	t 値	高位群 (実際、している) N=121 M (SD)	低位群 (していない) N=117 M (SD)	t 値
充実感	76.2 (10.73)	69.8 (12.00)		77.7 (10.07)	69.6 (11.74)	
充実-空虚	39.3 (5.71)	> 35.2 (6.59)	5.90***	39.8 (5.41)	> 35.4 (6.68)	5.51***
接近・信頼	19.6 (3.58)	> 17.9 (3.58)	4.20***	20.1 (3.30)	> 17.7 (3.74)	4.17***
自立-依存	9.6 (2.45)	> 9.6 (2.37)	-.22	9.9 (2.47)	> 9.3 (2.51)	1.86
日々の充実	7.7 (1.85)	> 7.0 (1.89)	3.26**	7.8 (1.72)	> 7.0 (2.09)	3.20**

: $p < .01$ *: $p < .001$

「してあげたい」および「実際、している」のいずれにおいても、高位群の方が「充実-空虚」、「接近・信頼」、「日々の充実」に関して、低位群より有意に得点が高かった。第3因子の「自立-依存」で差がなかったことは、配偶者をケアしたいと望むか否か、実際するか否かと精神的自立感の強さが無関係であることを意味する。そして差のみられた因子の結果からは、ケアしたいと望んだり実際にすることが、生きがい（充実）を感じることや、自分が理解されており日々充実していると感じることに関係していることが明らかとなった。

つぎに、「生きるうえで大切にしていること」10項目のうち、選択した2項目とも「自立・分離志向項目」の場合を「自立-自立群」、「自立・分離志向項目」と「関係志向項目」を1項目ずつ選択した場合を「自立-関係群」、2項目とも「関係志向項目」を選択した場合を「関係-関係群」とした。これら3群間で配偶者間ケア尺度のどの項目（具体的内容）に差があるかを分散分析で検討した。さらに有意な差が見出されたものについては多重比較（Bonferroni法）を行った（Table 3）。「してあげたい」と「実際、している」で対象者数が違っているのは、それぞれ

Table 3 配偶者へのケア（表出方向）に関する自立・関係志向3群の平均と分散分析

ケア	志向	1. 自立-自立群	2. 自立-関係群	3. 関係-関係群	
		<i>N</i> =53	<i>N</i> =227	<i>N</i> =234	
		<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>F</i> 値
		28.9 (6.25)	30.9 (4.58)	31.7 (4.16)	(<i>df</i> =2/511)
(してあげたい)					
1. 疲れているとき気配りをする		3.2 (.84)	3.5 (.59)	3.5 (.58)	5.87** 1<2,3
2. 元気かどうか気にかける		3.3 (.74)	3.5 (.56)	3.6 (.56)	4.48* 1<3
3. 困っているとき相談相手になる		3.3 (.85)	3.5 (.62)	3.6 (.57)	6.82** 1<2,3
4. 病気のとき、看病する		3.3 (.81)	3.6 (.58)	3.7 (.47)	11.29*** 1<2,3
5. 趣味や興味に関心をもつ		2.6 (.87)	2.9 (.86)	3.0 (.77)	5.34** 1<3
6. 考えや気持ちを理解する		3.2 (.85)	3.4 (.61)	3.4 (.59)	3.80* 1<3
7. 忙しいとき、用事の手助けをする		3.1 (.96)	3.3 (.68)	3.4 (.66)	3.98* 1<3
8. 態度や様子に心を配る		3.1 (.91)	3.3 (.69)	3.4 (.62)	5.99** 1<2,3
9. いつでも信じる		3.4 (.75)	3.6 (.61)	3.6 (.55)	<i>n.s.</i>
(実際、している)					
		<i>N</i> =47	<i>N</i> =210	<i>N</i> =219	
		<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>F</i> 値
		23.3 (6.30)	25.2 (4.98)	26.2 (4.36)	(<i>df</i> =2/473)
1. 疲れているとき気配りをする		2.4 (.85)	2.6 (.71)	2.7 (.66)	4.70* 1<3
2. 元気かどうか気にかける		2.6 (.88)	3.0 (.72)	3.1 (.66)	10.43*** 1<2,3
3. 困っているとき、相談相手になる		2.7 (.93)	2.8 (.78)	2.9 (.80)	<i>n.s.</i>
4. 病気のとき、看病する		2.8 (.95)	3.0 (.75)	3.1 (.77)	4.66* 1<3
5. 趣味や興味に関心をもつ		2.2 (.92)	2.4 (.88)	2.5 (.76)	<i>n.s.</i>
6. 考えや気持ちを理解する		2.4 (.93)	2.6 (.75)	2.7 (.71)	<i>n.s.</i>
7. 忙しいとき、用事の手助けをする		2.3 (.87)	2.6 (.82)	2.7 (.77)	6.48** 1<3
8. 態度や様子に心を配る		2.4 (.75)	2.7 (.78)	2.8 (.71)	6.86** 1<3
9. いつでも信じる		3.2 (.90)	3.3 (.78)	3.4 (.70)	<i>n.s.</i>

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$ 注) *F* 値に続く 1, 2, 3 の数字は群の番号を、不等号は多重比較 5%水準で差があることを示す。

の尺度に完全回答した者のみを対象としたためである。

その結果、「してあげたい」については、「いつでも信じる」(項目 9)を除くすべての項目で有意な差が認められた。さらに、有意差のあった 8 項目について 3 群間の多重比較の結果、「自立-自立群」は「関係-関係群」よりも、あるいは「自立-関係群」と「関係-関係群」のいずれよりも得点が低いことが明らかとなった。また、「実際、している」についても、5 つの項目について有意な差が認められ、3 群間の多重比較で、「自立-自立群」は「関係-関係群」よりも、あるいは「自立-関係群」と「関係-関係群」のいずれよりも有意に得点が低かった。「いつでも信じる」(項目 9)が、願望でも実際でも 3 群間に差がないのはいずれも婚姻を継続する関係にあることによると考えられる。しかし有意差のある項目に注目すると、実際に困っているときの相談相手になったり、配偶者に関心をもち理解する程度は、「自立-関

係群」や「関係-関係群」のように、相手との関わりを志向する者の方がより高いといえる。

(2) ケアされる(願望方向)

まず、願望方向についても表出方向と同様に配偶者なしのデータを除外し、配偶者間ケア尺度「してほしい」で得点の上位 30%、下位 30%の基準で高位群・低位群に分けた。また、「実際、してくれている」については、24%以上を高位群とし、26%以下を低位群とした。「してほしい」と「実際、してくれている」での比率が異なるのは、妥当な知見を得るに十分な対象者数の確保をしようとしたことによる。また「実際、してくれている」の高位群と低位

- 1) 自立・分離志向の「自分の心に正直に生きる」(項目 2)と「人生を自由に楽しむ」(項目 4)の 2 項目については、自立・分離の構成概念として妥当するか否かについては疑義があり得るが、関係志向性の各項目の構成概念妥当性には問題がないと判断される。したがって、関係性の効果について吟味するうえでは支障がないといえよう。

Table 4 配偶者からのケア（願望方向）高位群と低位群との充実感の比較

ケア	高位群 (してほしい) N=151 M (SD)		低位群 (そう思わない) N=154 M (SD)	t 値	高位群 (実際、してくれている) N=116 M (SD)		低位群 (してくれていない) N=124 M (SD)	t 値
充実感	74.4 (12.78)		73.1 (10.61)		79.0 (11.38)		69.7 (11.90)	
充実-空虚	38.4 (6.05)	>	36.5 (6.39)	2.74**	40.4 (5.40)	>	35.1 (6.49)	6.79***
接近・信頼	19.3 (3.83)		18.8 (3.15)	1.20	20.7 (2.91)	>	17.7 (3.98)	6.61***
自立-依存	9.2 (2.49)	<	10.1 (2.31)	-3.05**	9.9 (2.15)		9.5 (2.46)	1.03
日々の充実	7.4 (1.96)		7.6 (1.66)	-1.21	8.0 (1.60)	>	7.1 (2.00)	3.61***

: $p < .01$ *: $p < .001$

Table 5 配偶者からのケア（願望方向）に関する自立・関係志向3群の平均と分散分析

ケア	志向	1. 自立-自立群	2. 自立-関係群	3. 関係-関係群	
	(してほしい)	N=55 M (SD) 27.4 (6.24)	N=231 M (SD) 28.5 (5.10)	N=236 M (SD) 29.1 (4.68)	F 値 (df=2/519)
1. 疲れているとき気配りをする		3.2 (.91)	3.3 (.67)	3.4 (.59)	5.29** 1<3
2. 元気かどうか気にかける		2.9 (.89)	3.2 (.77)	3.2 (.73)	3.12* 1<3
3. 困っているとき相談相手になる		3.0 (.98)	3.1 (.85)	3.2 (.79)	n.s.
4. 病気のとき、看病する		3.1 (.87)	3.1 (.82)	3.2 (.78)	n.s.
5. 趣味や興味に関心をもつ		2.7 (.91)	2.6 (.89)	2.7 (.80)	n.s.
6. 考えや気持ちを理解する		3.2 (.87)	3.3 (.71)	3.3 (.66)	n.s.
7. 忙しいとき、用事の手助けをする		2.8 (.98)	3.1 (.86)	3.2 (.86)	3.25* 1<3
8. 態度や様子に心を配る		2.8 (1.00)	3.0 (.80)	3.1 (.79)	n.s.
9. いつでも信じる		3.3 (.84)	3.4 (.73)	3.4 (.64)	n.s.
	(実際、してくれている)	N=49 M (SD) 25.0 (6.18)	N=222 M (SD) 25.6 (5.45)	N=219 M (SD) 25.8 (5.57)	F 値 (df=2/487)
1. 疲れているとき気配りをする		2.8 (.84)	2.9 (.78)	2.9 (.77)	n.s.
2. 元気かどうか気にかける		2.8 (.85)	2.9 (.80)	2.9 (.80)	n.s.
3. 困っているとき、相談相手になる		2.8 (1.00)	2.9 (.87)	2.9 (.83)	n.s.
4. 病気のとき、看病する		3.0 (.88)	2.9 (.92)	3.0 (.89)	n.s.
5. 趣味や興味に関心をもつ		2.4 (.84)	2.2 (.83)	2.2 (.85)	n.s.
6. 考えや気持ちを理解する		2.7 (.88)	2.8 (.77)	2.8 (.81)	n.s.
7. 忙しいとき、用事の手助けをする		2.5 (.96)	2.7 (.90)	2.7 (.85)	n.s.
8. 態度や様子に心を配る		2.6 (.81)	2.7 (.78)	2.7 (.81)	n.s.
9. いつでも信じる		3.1 (.92)	3.2 (.75)	3.3 (.74)	n.s.

*: $p < .05$, **: $p < .01$

注) F 値に続く 1, 2, 3 の数字は群の番号を, 不等号は多重比較 5%水準で差があることを示す。

群で比率が異なるのは同点者がいたことによる。ついで高位群と低位群で充実感の各因子の得点の差を検定した (Table 4)。その結果, 「実際、してくれている」については, 高位群が低位群よりも第1因子「充実-空虚」, 第2因子「接近・信頼」, 第4因子「日々の充実」で得点が有意に高かった。「自立-依存」の認知にはかわりなく, 実際にケアされていると感じる方が, 生きがい (充実) を感じ, 配偶者

に理解されており日々充実していると感じる傾向が強いといえよう。

一方, 「してほしい」については, 配偶者間ケア尺度高位群・低位群の比較では, 「自立-依存」の第3因子で, 「してほしい」と思わない低位群は, 高位群よりも得点が高く, 自立意識が高いという結果が得られた。しかし, 第1因子の「充実-空虚」に関しては高位群の方が有意に得点が高く, 低位群は高位群

Table 6 充実感に関する自立・関係志向 3 群の平均と分散分析

志向 充実感	1. 自立-自立群 N=53 M (SD) 71.8 (12.64)	2. 自立-関係群 N=242 M (SD) 74.4 (11.26)	3. 関係-関係群 N=245 M (SD) 72.8 (12.67)	F 値 (df=2/537)	
充実-空虚	36.5 (7.14)	38.1 (5.74)	36.8 (6.43)	3.19*	1<2
接近・信頼	17.9 (3.64)	18.9 (1.24)	19.3 (4.40)	3.63*	1<2,3
自立-依存	10.3 (2.53)	9.8 (2.24)	9.0 (2.36)	10.76**	1,2>3
日々の充実	7.0 (1.95)	7.4 (1.85)	7.5 (1.80)	1.88	n.s.

*: $p<.05$, **: $p<.01$

注) F 値に続く 1, 2, 3 の数字は群の番号を, 不等号は多重比較 5%水準で差があることを示す。

に比べて自立しているものの空虚感が高いことが明らかになった。また, 配偶者にケアしてほしいと望むか否かが「接近・信頼」や「日々の充実」とは関係ないことから, 生きがい(充実)のために配偶者のケアを望むが, 自立を求める者はケアされることを望む傾向が弱く, 「日々の充実」に関しては尺度得点が中央値を超えていたことから, 配偶者にケアしてくれることを望むか否かにかかわらず日々の充実を得ていると解釈できよう。

また, 自立・関係志向の 3 群間の分散分析の結果, 「してほしい」については, 項目 1 は 1%水準で有意な差が認められ, 項目 2, 7 は 5%水準で有意な差が認められた (Table 5)。さらに多重比較したところ, いずれも 5%水準で「自立-自立群」と「関係-関係群」の間に差がみられた。これらは関係志向が強いと元気かどうかを気にかけ, 疲れていたら気を配ってほしい, 忙しいときは用事を手伝ってほしいという傾向が高まることを示すものである。一方, 「実際, してくれている」については, すべての項目において有意な差は認められなかった。このことは, 「実際, してくれている」と感じるか否かは関係志向の強弱とは無関係であることを示すものである。

3. 「関係志向性」と充実感

つぎに, 自立・関係志向 3 群間で充実感尺度のどの因子に差があるかを分散分析で検討した。有意な差が見出されたものについては多重比較 (Bonferroni 法) を行った (Table 6)。その結果, 自明ともいえることであるが, 関係よりも自立を志向する者や自立と関係の両方を志向する者は, 関係だけを志向する者よりも充実感尺度での自立意識が高かった。

また, 相手との関わりを志向する者や自立と関係の両方を志向する者は, 自立だけを志向する者よりも相手に理解されていると感じる傾向が強く, さらに自立と関係の両方を志向する者は自立だけを志向する者より生きがい(充実)を感じる傾向が強いことが明らかとなった。日々の充実については, 自立・関係の志向性による差は見られなかった。

4. 職業的自立と充実感

「関係性」の側面における「ケアする」こと, 「ケアされる」ことはともに, 成人期のアイデンティティ統合を支える充実感において重要な要素であることが示唆されたが, ここで従来から重要視されてきた既婚女性における職業的「自立・分離」の側面についても検討する。というのは, 妻の有職は夫による家事・育児支援を必要とすることになり, 夫婦のケアの内容や程度と密接な関わりをもつと考えられるからである。専業主婦, 何らかの形で職業 (パートタイム・在宅勤務など) をもつ者, フルタイムで働く者の 3 群に分け, 夫婦間の充実感尺度の差を検討した (Table 7)。各群で夫婦間の相対差をとりあげるのは, 夫婦間の充実感の差異が不平等感や不満につながりやすいと考えたことによる。

分析の結果, 専業主婦である夫婦間に最も多くの差があらわれた。専業主婦の場合は, 夫に比べて空虚を感じ, 自立的でなく依存的で, 日々の充実が感じられないことを示唆している。しかし, パートなど何らかの形で職業をもつ妻になると, 依存しているという感覚はなくなりますが, 「充実」, 「日々の充実」での夫婦間の差は見られなくなっている。さらに, フルタイムで働く妻は, 「自立」, 「日々の充実」で 10%水準の傾向差があり, 夫よりも日々の生活

Table 7 妻の職業の有無の違いによる充実感の夫婦間の差

充実感	妻が専業主婦の夫婦			妻が何らかの職業をもつ夫婦			妻がフルタイムで働く夫婦		
	妻 (N=120)	夫 (N=120)	t 値	妻 (N=113)	夫 (N=113)	t 値	妻 (N=51)	夫 (N=51)	t 値
充実-空虚	36.2 (5.83)	38.5 (6.25)	-3.00**	37.6 (6.41)	37.2 (6.56)	.45	39.2 (6.26)	37.9 (6.66)	1.06
接近・信頼	18.8 (3.42)	19.5 (3.64)	-1.55	18.8 (3.63)	19.1 (3.66)	-.64	19.1 (3.69)	19.6 (3.17)	-.75
自立-依存	8.4 (2.30)	10.4 (2.07)	-6.89***	9.1 (2.28)	10.0 (2.26)	-2.96**	9.4 (2.31)	10.3 (2.47)	-1.90†
日々の充実	7.0 (1.78)	7.7 (1.75)	-2.93**	7.5 (1.98)	7.4 (1.98)	.51	8.1 (1.90)	7.4 (1.88)	1.90†

†: $p < .10$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

に充実を感じる傾向が示唆される。

つぎに、フルタイムで働く妻と何らかの職業をもつ妻と専業主婦の妻の3群間で充実感尺度のどの因子に差があるかを分散分析で検討した。第1因子「充実」と第3因子「自立」で5%水準、第4因子「日々の充実」で1%水準の有意な差が見出されたので、さらに多重比較 (Bonferroni 法) を行った。その結果、第1因子「充実」と第4因子「日々の充実」でフルタイムで働く妻は他の群よりも得点が高く (いずれも $p < .05$)、また第3因子「自立」ではフルタイムで働く妻の方が専業主婦群よりも得点が高かった ($p < .05$)。また、妻の有職度別3群間で夫の充実感尺度の差を分散分析で検討したところ、いずれの因子にも3群間に有意な差は見出されなかった。このことは、妻の有職度が夫の充実感には影響しないことを意味している。

以上の結果は、既婚女性にとって職業を得ることが、充実感を増し、夫と平等化していくことを認知させるものであるが、夫の充実感は妻が職業をもつか否かには左右されないことを示すものである。

考 察

本研究で用いた充実感尺度における充実感とは、既述のように、大野 (1984) のいう「健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情」と定義される。充実感はアイデンティティ統合過程において、その支えとなる重要な感覚である。本研究では、そのなかに「充実感-空虚感」「接近・相互信頼-孤立・不信」「自立-依存」「日々の充実-単調」という4つの因子を見出した。そのうえで、まず「関係性」の側面を、「ケアする」(表出方向)と「ケアされる」(願望方向)の2方向から検討した。その結果、「ケアする」(表出方向)は、充実感、す

なわち「健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情」を得るうえで重要な要素であることが示唆された。また、他者との関係を志向するほど「ケアする」度合いが高いことも明らかとなった。「ケアされる」(願望方向)においても、「実際、してくれている」という感覚は充実感を高めることが明らかとなった。

また、「してほしい」項目に関しても、充実感尺度の第1因子「充実感-空虚感」において配偶者間ケア尺度の高位群・低位群の間に差が認められた。この差は、「してほしい」と相手に求めることができることも充実感を得るうえで重要な要素であることを示唆している。他者との関係志向が最も強い「関係-関係群」は関係志向の最も弱い「自立-自立群」に比べ、「ケアする」面だけでなく相手に「ケアしてほしい」と求める能力においても優れていることが示唆された。人間にとって気持ちを表現することは「自己への配慮」であるとともに、相手から「ケアされる」契機ともなるものである。Mayeroff (1971) は「“あの人はわたしを信頼している”という認識は、ケアされている人が、そのような信頼が正しいものだと思い、自分自身が成長していくのだということを確信するのに、大きな力を発揮する」(田村・向野訳, 1993, p. 50)と述べている。このように、信頼関係のもとで「ケアしてほしい」と求めることができ、実際に「ケアされる」ことは、アイデンティティ形成過程において重要な要素であると考えられる。心理的・職業的な「自立・分離」の側面をもちながら、他者とも関わりをもち、解決できない葛藤があっても相手との結びつきを持続しながら根気よく相手を理解しようとしたり、自分を理解してもらおうと努力する「関係性」の側面をバランスよくもつことの重要性が示唆された。Erikson (1968) は、最

善のアイデンティティ感に附随するものとして「肉体的にくつろいだ感じ」や「自分は重要な人々から認めもらえるだろうという内的な確信」などをあげているが、これらは両側面をバランスよく発達させることによって得られるものであろう。

山本(2002)の指摘するように、成人期のアイデンティティ形成過程においては、従来見落とされがちであった「ケアする」、「ケアされる」という「関係性」の側面に着目し、「自律・分離」の側面にのみ重きを置きがちであった傾向を修正し、補完していくことが望まれる。

ところで、本研究の最終段階でとりあげた職業的「自立・分離」の側面については、妻の有職度別に分けた3群で充実感の各下位尺度での夫婦間の差を調べた(Table 7)。その結果、妻の有職度が高まるほどその差が少なくなることが明らかとなった。また、充実感に関する妻の有職度別3群間の分散分析の結果では、フルタイムで働く妻は専業主婦より自立していると感じており、生きがいや日々の充実を強く感じていることが示唆された。さらに、妻の有職度別3群間で夫の充実感尺度の差を分散分析で検討した結果では、いずれの因子にも3群間に有意な差は見出されなかった。自ら職業をもつ夫の充実感、妻が職業をもつか否かには影響を受けないことが示唆された。このことから、職業面での「自立・分離」の要素は、成人期のアイデンティティ形成過程における充実感、自己肯定感、また充実感の夫との平等化の獲得に重要な役割を果たすものであることが明らかとなった。O'Connell (1976) も、職業をもつことがアイデンティティ感覚の獲得を促進すると主張しているが、これを支持する結果となった。関係性重視の立場からみると、家族を「ケアする」という「関係性」の側面だけでは十分な充実感、自己肯定感、夫との平等感は得られにくいともいえる。これに関して岡本(1991)は、家族を「ケアすることからは「成果が確認しにくく、また目に見える評価も得られにくい」と述べている。仕事をもつ女性は、外に仕事をもつことで、家庭での充実感、自己肯定感の不足を補うことができているのかもしれない。岡本(前掲書)が指摘しているように、家庭においても「ケア」を目にみえるように、また理解されるようにしていく必要がある。そのための一つの方法として、家庭における日常的なコミュニ

ケーションの改善に具体的なトレーニングを用いることが考えられる。例えば、Ivey (1974) のマイクロトレーニングは、もともと教師やカウンセラーのためのトレーニングとして開発されたものであるが、いまや個人の成長とコミュニケーション・スキルの向上を目的として一般の人びとにも用いられており、夫婦関係のコミュニケーション改善にも役立つ得るものである。他者の声に耳を傾け、ケアし、ケアされるという温かな関係性を築いていくのに役立つ有効なトレーニングであると考えられる。

本研究は、「ケアする」「ケアされる」の二方向が、アイデンティティ形成にとって自己肯定感を支え充実感を高める可能性をもつものであることを示唆した。また、「ケアしてほしい」と求める能力が「関係性」にとって重要な要素であることも示した。コミュニケーションの改善により、人々が家庭における「ケア」に新たな価値を見出し、職業をもつことだけでなく「ケアする」「ケアされる」ことによって充実感を得られるようになれば、成人期のアイデンティティの統合にとってより大きな支えとなるであろう。

謝辞

本論文は、佛教大学教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。修士論文作成にあたりご指導いただきました元佛教大学教授福原眞知子先生ならびに調査にご協力いただきました皆様に深謝申し上げます。また、加筆・修正にあたりご助言を賜りました佛教大学西之園晴夫教授をはじめ諸先生方に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Erikson, E. H. 1959 Identity and The Life Cycle. New York: International University Press. 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房.
- Erikson, E. H. 1968 Identity: Youth and Crisis. New York: Norton. 岩瀬庸理(訳) 1973 アイデンティティ: 青年と危機 金沢文庫.
- Gilligan, C. 1982 In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development. Cambridge, MA: Harvard University Press. 岩男寿美子(監訳) 1986 もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店.
- 林 巨樹(監修) 1985 現代国語例解辞典 小学館.
- 平山順子 1999 家族を「ケア」ということ—育児

- 期の女性の感情・意識を中心に 家族心理学研究, 13, 29-47.
- 伊藤美奈子 1993 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究. 教育心理学研究, 41, 293-301.
- 伊藤美奈子 1997 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房.
- 伊藤美奈子 1998 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱. 心理学評論, 41, 15-29.
- Ivey, A. E. 1974 Basic Attending Skills. Amherst, MA : Microtraining Associates. 福原真知子(訳) 1999 マイクロカウンセリング基本のかかわり技法 丸善株式会社.
- Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- Josselson, R. L. 1994 Identity and relatedness in the life cycle. In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant & D. J. de Levita (Eds.) *Identity and Development: An Interdisciplinary Approach*. Thousand Oaks, CA: Sage, 81-102.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 7, 31-40.
- Kohlberg, L. 1984 *Essays on Moral Development Vol. 2: The Psychology of Moral Development*. New York: Harper & Row.
- Mayeroff, M. 1971 *On Caring*. New York: Harper & Row. 田村真・向野宣之(訳) 1993 ケアの本質—生きることの意味— ゆみる出版.
- 三枚奈穂 1998 成人女性における自我同一性感覚について—相互協調的・相互独立的自己観との関連から— 教育心理学研究, 46, 229-239.
- O'Connell, A. N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*, 44, 675-688.
- 岡本祐子 1991 成人女性の自我同一性発達に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, 28, 7-26.
- 岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について—理論的展望と生活レベルに見られる2,3の問題— 広島大学教育学部紀要(第二部), 44, 145-154.
- 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 岡本祐子 1997 ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究I—高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析— 広島大学教育学部紀要(第二部), 46, 111-117.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 大日向雅美 1988 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証— 川島書店.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究—自我の二指向性の観点から— 教育心理学研究, 36, 238-248.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究—青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.
- 山本孝子 2002 成熟した人間像のとらえ直し 佛教大学教育学部学会紀要, 1, 73-99.

(受付: 2003.2.5, 受理: 2003.11.10)